

ビバハウス便り No. 113 新たなメンバーを迎え入れ 活気づくビバハウス  
2016. 6. 16 ビバハウス責任者 安達 俊子

6月になると農業と漁業の町余市は一気に活気に満ち溢れる。サクランボの樹は、すでに花が散り実をつけ、レモン色、いや、すでにオレンジ色をした実をつけている樹もある。海では4月から始まった甘エビ漁が最盛期に入り、ほっけ漁も始まった。ビバの畑で、若者たちが育ててくれたイチゴも真っ赤に実り、昨晚の夕食のデザートとしてみんなで味わった。

毎年若者達が奴さんとして参加してきた「余市神社例大祭」(6月9～11日)も無事に終わった。今年はビバのメンバーも増えたので10代の少年から女性も含め5名の若者が参加した。総勢16名の奴軍団の中で、スタッフも加えると7名のビバチームは、今や余市祭りには欠かせない存在になっている。

家庭内に居場所のなかったこの10代の少年はビバに来てからはまさに水を得た魚のように、グループワークの農作業にも、その他のビバの各種のプログラムにも全力で取り組み、野球の練習で鍛えたチームワークの経験を十分に発揮し、明るく元気に生活している。久しぶりに訪問してくれた家族のみなさんもあかるくのびのびと常に笑顔いっぱいの彼の変化にびっくりされていた。前号でマラソン参加のことで紹介した女性は、見事に完走し、休むまもなく祭りにも参加した。今年は久しぶりにビバに複数の女性を迎えることになり、函館からの女性はすでに試験入所を終了し、正式にビバで生活する事を決意した。さらに別の東京からの女性が試験入所を希望しこの23日に着く事になっている。3名の女性陣は、久しぶりなのでどんな新しい変化が生まれるのか今から楽しみだ。

これまでも書いてきたように、ますます相談件数も増え、ひきこもりも長期化し、高年齢化して、自立までには相当の期間を要するような状況の中で、現在は全国にもそう数の多くないビバのような「合宿型支援組織」の役割はますます重要度を増すものと思われる。

国の施策には、さまざまな変化があったが、ビバハウスでは2000年9月1日から一貫して「合宿型」を実施してきたことの意味を今改めて考えている。

この間特にうれしかったのは、これまでも毎年6月に数日間ビバに「里帰り」してきてくれる埼玉県の子K子さんを今年も迎えることが出来た事だ。K子さんは、地元の支援施設で1年間頑張った自分のお金でビバに来ている。ビバハウス定例の全体ミーティングで「私は9年前自分を変えるためにビバにきました。そして私は3年間ビバにいる間で変わりました。皆さんもそのような願いがあれば是非私のように実現してください。」とみんなを激励してくれた。K子さんが来てくれるお陰で、日ごろ近くにいながらもなかなかお会いできない人々にも毎年会えるようになっている。彼女に関わる全ての人々が彼女を支え、成長させて下っていることを今年も実感できた。心からの感謝を申し上げたい。